

無制約者と知的直観（一）

——『テイマイオス註解』から『自我論』へ——

浅沼 光樹

序——『テイマイオス註解』

一九九四年に、つまり執筆後ちょうど二百年を経てようやくわれわれの前に姿を現した若きシェリングの遺稿『テイマイオス註解』⁽¹⁾（以下『註解』と略記）は編者のハルトムート・ブフナーが述べているように、刊行中の『歴史批判版シェリング全集』（以下『全集』と略記）の“Voraus-Edition”という位置を与えられている。したがって一方において、刊行中の“Werke”から将来刊行が予定されている“Nachlass”へという「系列」の移行を予め見越して試験的に編集方針に幾つか変更が加えられているものの、他方において構成は全体としてみると、公刊著作を扱う『全集』

第一系列に属する既刊に準拠し、それを基本的に踏襲するものとなっている。ところが「編者報告」とは別に巻末に解説論文が併収されているという点で——あるいはこれは“Voraus-Edition”に固有の事情と言うべきなのかもしれないが——『註解』の構成は標準的なそれから些か逸脱しているように見える。

ヘルマン・クリングスの手になるこの論考——それは「生成と物質（Genesis und Materie）」と題されている——は意図的であるか否かはともかく、結果的に単なる解説の域を超えて『註解』に対する一つの解釈を提示するものとなっている。さらにはこれ以後『註解』の解釈者は、たとえクリングスの解釈を最終的には却けようとする場合でも、

彼がこの論考で提起した諸論点に配慮しつつ自身の見解を述べる習わしになっているようである。⁽²⁾ こうした事情を勘案するならば、クリングスの論考は『註解』理解の枠組みの一つをきわめて早い時期に、しかも非常に完成度の高いレベルで提示したものであると言つて差し支えないように思われる。

しかしながら、改めてクリングスの論考に立ち返り細に内容を検討してみるならば、たしかにその主張自体は旗幟鮮明なのではあるが、それとは裏腹に——あるいはそうであればあるほど——論拠に関して根本的な脆弱性を抱えているように見える。ところが彼の提示する枠組みを基本的に受け入れる場合には言うまでもなく、それに批判的に対峙しようとする場合でも、クリングスの論考が孕む問題点が明確に把握されていたかといえれば必ずしもそうとはいきれない。つまり、批判の鋒先がクリングスの解釈においてわれわれが難点と考える次元にまで届いていたというようにも私には思われないのである。

いまここで私はクリングスによる『註解』解釈の再検討を企てようとしているわけであるが、その動機的一端はこ

こにある。だが動機は目的ではない。むしろ意図されているのは、この検討を通じてクリングスの解釈がいわばおのずから自己の見解を否定しつつ、さらには対立すると見なされている別の解釈との接合点を自らの内部から生み出していき、そのようにして全く新しい眺望が切り開かれていく様子を目撃すること、いわばその止揚(aufheben)に他ならない。この止揚によつてシェリングの初期思想はいかなる相貌を見せることになるのであろうか。

しかしいずれにしても、まずはクリングスの主張の基本線を再確認することから始めなければならないであらう。

一 ヘンリツヒの『註解』解釈

『註解』初刊に収められているだけでなく、著者が一見素知らぬ風を装っていることも手伝つて、クリングスの論考はあたかも最初の『註解』解釈であるかのような印象を与える。しかし内容から判断する限り、先行する解釈が意識されているのは間違いない。それどころか彼の論考は、

他ならぬこの先行解釈へのアンチ・テーゼとも見なしうるのである。だとすると、彼の論考の主旨はこの先行解釈を参照することによっていつそう明確に捉えられるはずである。

一九八六年の論文「思弁的観念論の道 (Der Weg des spekulativen Idealismus)」⁽ⁱⁱⁱ⁾のなかで一節を割いて、ディーター・ヘンリッヒはシェリング研究史上初めて『註解』の具体的内容に言及するとともに、『註解』についての自らの理解を披瀝した。その節は、彼の主張を集約するように“Schellings kantianisierende Platondeutung”と題されている。これによって一体いかなることが意味されているのであろうか。

これ「『プラトン註解』は『テイマイオス』のテキストに関するものであるが、その理解のために『ピレボス』において展開される (23c ff) 存在者の種類に関する教説 (die Lehre von den Arten des Seiendes) がふんだんに引き合いに出されている。この教説の解釈にシェリングの註解はその哲学的中心を有している。この解釈

は全くもってカントの理論によって主導されている。『:]シェリングの意図は以下を示すことにある。つまり、プラトンは世界の起源と永遠のアイデアとに関する語りという装いのもとで、自らのもとに世界におけるあらゆる現実存在を包摂しうるとともに自らの場所と起源とを悟性ないしは表象能力の統一に有する、そのような諸概念に関するカントの構想を展開している、ということである。^(iv)

周知のように、『テイマイオス』においてはデミウルゴスによる世界創造の物語が語られている。つまり、デミウルゴスは与えられた素材を前にして、アイデアの世界を眺めつつ可能な限りそれに似せてこの素材を加工し、世界を構築すると語られている。『註解』においてシェリングはこれをカント的に解釈する。つまり——これも周知のように——『純粹理性批判』においては、与えられた直観の多様に純粹悟性概念(カテゴリー)が適用されることによって現象界が成立するという基本構想が提示されている。シェリングは『註解』においてこのモデルを用いて『テイマイ

オス』における世界創造論を解釈する。言い換えると、『テイマイオス』の世界創造論を『純粹理性批判』の構成主義的認識論と基本的な構想および構造において同一である、と見なすのである。

このようにデミウルゴスによる世界創造の物語をカント的に解釈するにあたって、さらにシェリングは『ピレボス』における「存在者の種類に関する教説」を介在させる。つまり、『ピレボス』においてアペイロン（無限）、ペラス（限度）、コイノン（これら二つから混合され、生成させられた存在）、アイティア（この混合と生成の原因となるもの）が、存在者の四つの種類（類、種族）とされるのであるが、これらがデミウルゴスの世界創造における四つの主要契機に順に割り振られるのである。すなわち、ペラスは形式としてのアイデアに、アペイロンは形式を受け取る素材に、コイノンは両者の結合によって生ずる世界に、そしてアイティアは世界構築者としてのデミウルゴスにという具合である。しかもこのときシェリングはこれらの存在者の四つの種類にかテゴリー（純粹悟性概念）という資格を与える。

プラトンは、それらのもとで世界が表象される主観的な諸形式以外の如何なるものについても語っていないということ、彼はペラスとアペイロンのもとで単なる形式的な世界概念以外の何ものをも、そしてアイティアのもとで、そのもとでコイノンにおけるこれら両者の結合が彼の哲学に従って客観的に考えられなければならないような悟性概念以外の何ものも理解していない、ということが明らかに見てとられる。^(五)

ところで、このように『テイマイオス』の世界創造論の主要契機にかテゴリーという資格が与えられることは、それらが次のような身分を持つものと見なされることに他ならない。つまり「経験から独立に、（超越論的な）原理として、可視的世界の現存の根底に存するとともに、それなしには時空のうちに現存する事物が可能であると考えられない」^(六)、そのような概念としてである。なるほどプラトンのアイデア論解釈の文脈においては、これによってアイデアを何らかの形而上学的実体と解する伝統的解釈に対して、アイデアを世界そのものの可能性の論理的制約と解するという別

の選択肢が提起されることになる。⁷⁾しかし『純粹理性批判』との関係で見ると、カテゴリーがより根源的で普遍的な次元に設定されているという点を看過するわけにいかない。つまりカテゴリーの数が四つにまで絞り込まれているだけでなく、カント的に言えば、悟性の領域のみならず直観の領域までも包括する場面で、言い換えると表象能力一般の根源的形式としてカテゴリーが語られるのである。

こうして『純粹理性批判』が提示するモデルに基いて『デイマイオス』の世界創造論が一種の超越論的哲学として解釈され、なおかつそこへ『ピレボス』の「存在者の種類」がカテゴリーとして導入される。このときカントの認識論はカテゴリー論に焦点を合わせつつ、プラトンの世界創造論の上に重ねられ、それを背景として眺められていると言える。ところがこれによってカント哲学の背後にいわば原カテゴリーを主題としうる次元が開かれることになる。この原カテゴリーの主題化——ヘンリッヒ自身の言い方では『ピレボス』における「存在者の種類に関する教説」のカント的解釈——に、彼は『註解』の「哲学的中心」を見る。つまり『純粹理性批判』においては主題とされない原カテ

ゴリーの主題化はいわば否応なしにカントからの逸脱——「ずれ(*eine Verschiebung*)」——をもたらさざるをえないが、まさにこの逸脱に『註解』の哲学的意義が見て取られるのである。

しかしそれはいかなる意味における「ずれ」なのだろうか。

シェリングがカントの諸カテゴリーを『ピレボス』のゲネーのうちに再認することによって、彼はしかしカントのカテゴリー論の組織のうちへ同時に或るずれをも持ち込むことになる。ペラスは普遍的な統一形式であり、これにアペイロンが未規定的な多様として対応する「 $\dots$ 」。これにともなってカント自身の場合とは全く異なり、そしておそらくはラインホルトにインスパイアされて諸カテゴリーの関係は、それ自身が二つの根本カテゴリー相互の反立的関係 (*die antithetische Relation*) として考えられうるような根本対立の媒介関係と解される。⁸⁾

原カテゴリーの主題化は同時にカテゴリー論の再編を伴わざるをえず、これによって諸カテゴリーの関係は「それ自身が二つの根本カテゴリー相互の反立的関係として考えられうるような根本対立の媒介関係」として再定義される。これがヘンリッヒの言う「ずれ」に他ならない。もともとこの構造が実際に「カント自身の場合とは全く異な」るか否か、また仮に異なるとしてその差異がどれ程のものかという点に関しては検討の余地があるだろうし、同じことはラインホルトによる影響の有無に関しても言える。^(九) しかしここではヘンリッヒが直後にこの「ずれ」をさらに「プラトンのテキストによって強いられたカントのカテゴリー論の改造^(一〇)」と言い換えていることに注目したい。つまり、このように述べることによって彼は、上記二つの契機との有る無しに関わらず、この構造が顕在化してくる際に「プラトンのテキスト」による強制力が働いていることを指摘しているのである。そして、もしこのように「カントのカテゴリー論の改造」が「プラトンのテキストによって強いられた」のだとすると、ヘンリッヒの云う“kantianisierende Platondeutung”は一方的な「カント化」ではなく、反対に

カントのカテゴリー論がプラトン化される側面、つまり“platonisierende Kantdeutung”とでも称しうる一面を背後に蔵していると解されねばならないであろう。^(一一)

さらにまた原カテゴリーといえども、それらがカント的に悟性概念として解釈されている以上、「自らの場所と起源とを悟性ないしは表象能力の統一に有する」のでなければならぬ。しかしそれはたんにそうあるべきだというにすぎず、その具体的内実、たとえば表象能力の統一と呼ばれるものと諸カテゴリーとの内面的関係が説明されているわけではない。言い換えると、『純粹理性批判』において既にそうであったように、『註解』においても原カテゴリーは何らかの原理に基づいて組織的に導出されているわけではない。実際『註解』には未だ一つの原理に基づく体系としての哲学という構想は見られず、その登場は『哲学一般の形式の可能性について』（以下『形式論』と略記）を待たねばならない。にもかかわらずカテゴリーから原カテゴリーへの遡源が試みられ、なおかつそのうちに一つの根本構造が認められるなら、唯一原理に基づく知の体系という構想まではあと一步とも言える。このような角度から眺めてみ

ると、初期シェリングの思想展開のうちに占める『註解』の位置が特定されてくる。

この改造「Ⅱプラトンのテキストによって強いられたカントのカテゴリー論の改造」のうちにはしかし、次のための前提も見られねばならない。すなわちシェリングが、時を経ずしてフィヒテの知識学が現れたとき、そのうちに自身のプラトン解釈において導入されたカテゴリー論の雛形(Muster)を再認することができ、それが全く新しい基礎の上にもたらされているのを見ること^(二四)ができたということである。

『註解』執筆の直後、フィヒテの『知識学の概念について』(以下『知識学の概念』と略記)が出版される^(二五)。そこには絶対的自我の自己指定という唯一の原理に基づく知の体系という新構想が示されており、これに触発されてシェリングは『形式論』を書き上げる。つまり、このときシェリングは自らの原カテゴリー論と類似の試みを『知識学の概念』のうちに「再認」しただけでなく、さらにそれが絶対的自

我という「全く新しい基礎の上にもたらされている」のを見出したのである。『形式論』においては、『註解』の原カテゴリーの根本構造が自己自身を指定する絶対的自我との関係において把握し直される。その際シェリングは、たしかに一方ではフィヒテの洞察との整合性を最大限保つように努めてはいる。しかし他方では『註解』の原カテゴリー論までも手放すつもりはないのである^(二六)。その限りにおいて『形式論』における知の原形式の探求は『註解』のカテゴリー論の延長線上にある。つまり『知識学の概念』を紹介しながら両者は連続していると見なされるのである。

ところで、このように『註解』において見出された原カテゴリーの構造は『註解』ではカント的な、そして『形式論』ではカントⅡフィヒテ的とも言うべき認識主観に結びつけられて語られている。しかしヘンリッヒによると、この構造そのものはこの種の認識主観に拘束されているわけではない。「魂の、それゆえ主観性の統一を先行する客観的な観念性から理解する」という次元が『ディマイオス』^(二五)にはあり、この次元を「シェリングの解釈はさしあたってカント的主観の統一に還元しようとした」^(二六)と彼は語ってい

る。この言い回しが暗示しているのは、原カテゴリーの構造がカント的な認識主観への拘束から解き放たれて客観化しうる、ということである。このように述べることによって、ヘンリッヒが『註解』を著しく包括的で長期的な展望のうちに眺め、その思想的意義を評価しようとしていることが明らかになる。要するに、彼は『註解』のカテゴリー論のうちに——ザントカウレンの言葉を借りるならば——のちにヘーゲルによって精緻に仕上げられることとなる「理性概念の弁証法 (Dialektik von Vernunftbegriffen)」の^(二七)萌芽を認めているのである。

以上を総括すると、ヘンリッヒの云う“kantianisierende Platondeutung”の核心を構成しているのは以下の四点である。第一に、『註解』の哲学的中心を原カテゴリーの主題化に、言い換えると『ピレボス』における「存在者の種類」のカント的解釈に見ること、第二に、そこに持ち込まれる「ずれ」としてカントのカテゴリー論のプラトニックな改造が指摘されること、第三に、『註解』の主題を、その直後に成立した『形式論』と同一の問題圏に属するものと解す

ること、第四に、『註解』をヘーゲルを終着地とする「思弁的観念論の道」の起点の一つと解することである。^(二八)さて、これらの四点を踏まえてクリングスの論考の内容を概観することにした。

二 「生成と物質」(一)

——クリングスの解釈の基本方針

クリングスの解釈がヘンリッヒの解釈を意識しているばかりか、それに対するアンチ・テーゼとして構想されていることは、クリングスがヘンリッヒの用いている“kantianisieren”という語を引用しつつ、彼の解釈に対する異論を述べている点に端的に表れている。

一瞥した限りにおいては、あたかもシェリングがプラトンをカント化しているかのように (als ob Schelling Platon kantianisiere) 見える。[…]

しかしカント的な諸概念と諸用語のあからさまな使

用に、そして超越論的哲学的な諸構想の助けを借りたプラトンのイデア論の解釈に、カントの概念論をプラトン化する (die kantische Begriffslehre zu platonisieren) という少なからず強力な傾向が対立している。それどころかより詳しく見ると示されるのは、シェリングがその逆よりもより強くカントの超越論的で批判的な端緒 (Ansatz) をプラトンのな思考連関の方へと曲げてい^(二九)る、ということなのである。

まずは最初の二文がヘンリッヒの主張の要約であることに注意しよう。つまり、「カント的な諸概念と諸用語のあからさまな使用」および「超越論的哲学的な諸構想の助けを借りたプラトンのイデア論の解釈」のために『註解』においてはおもっぱらプラトンが「カント化」されているように見える。だがそれは「一瞥した限りにおいて」にすぎない。というのも「プラトンのカント化」に「カントの概念論」(すなわちカテゴリー論)「をプラトン化するという少なからず強力な傾向」が対立しているからである。ここま^(三〇)でがヘンリッヒの主張の要約である。しかし——とクリン

グスは言う——「より詳しく」見れば「その逆よりもより強く、カントの超越論的で批判的な端緒をプラトンのな思考連関の方へと曲げている」ことが示される、と。

ヘンリッヒ同様、クリングスも「カント化」と「プラトン化」の双方向的な影響関係を認めている。しかしヘンリッヒにおいては喻えるならば、向きは逆であるけれども量は等しい二つのベクトルの対立関係がイメージされているのに対し、クリングスにおいてはプラトン化のベクトルはヘンリッヒのそれと方向を等しくするものの、量に関しては修正が施され、ヘンリッヒの云うプラトン化を凌駕していると主張されている。だがこれは具体的にはどのようなことを意味しているのだろうか。引用の直後に「純粋な諸形式の場所が根源的には人間ではなく神の悟性である^(三〇)」という解釈——このような「客観的観念性」の契機であればヘンリッヒも指摘していた——が挙げられていて紛らわしいが、クリングス固有の主張が述べられているのはさらに後の箇所である。

シェリングがテイマイオス論文においてカント哲学

と全く異なることを行っているということは以下においても示されている。つまり、純粹概念と直観との関係というカントの問題がそこでは何の役割も演じていないが、なるほど純粹形式と質料 (Materie)、ならびに悟性と魂との関係に関するプラトンの諸々の問い——これらの問いは逆に『純粹理性批判』においてはいかなる役割も演じていない——はそうである、というのである。エイドスが理性に帰属する純粹形式であるならば、——何によつて形式は受容されるのか。

いかにして純粹形式 (イデア) に対立する原理であり、これにともなつていかなる認識可能性からも逃れ去るように見える「受容者」(ヒュポドケー) はそもそも概念把握されるのか。これはプラトンの問いである。

シェリングはこの問いを追求するが、しかしそれは文献学的に裏付けられたプラトン解釈という形態においてもなく、ある種のプラトンの哲学的思索においてもでない。むしろ彼は受容するピュシスに関するプラトンの問いを「物質 (Materie)」に関する彼自身の問いへと変形するのである。

この問いをとところでカントは不可能な問いと見なしたのであった。たしかにカントにおいても類似の媒介問題、つまり純粹直観と純粹悟性概念の媒介問題が見出される。これをカントは『純粹理性批判』の図式論の章で解決しようとしている。だがシェリングはこのことを暗示しているのではない。背景にあるのはシェリングにとつては(超越論的に根拠づけ可能な)自然哲学の問題であつて、理論理性の批判の問題ではないのである。

したがつて語や言葉の使用によつて騙されることはできない。どれほどシェリングがカント的な概念や用語を用いているとしても、思惟にとつての課題はカントの理性批判のそれではなく、プラトンの『ティマイオス』のそれ、つまりいかにして「理性によつて生みだされるもの」が「必然性によつて生起するもの」に関係するか、なのである。イデアと「質料 (Materie)」の関係が問題なのである。^(二二)

『註解』においては、『ティマイオス』の世界創造論が

カント的に解釈される（＝プラトンのカント化）。これによって一種の超越論的哲学が構想される。ところがこの超越論的哲学は逆にプラトンの影響を被ることによって、カント哲学から逸脱せざるをえない（＝カントのプラトン化）。

——ヘンリッヒとクリングスの歩む道はここまでは同一である。さてこの逸脱が生ずる場面をヘンリッヒは、二つのカテゴリー論の間に、すなわち「存在者の種類に関する教説」（『ピレボス』）と「カントの概念論」との間に設定していた。つまり、原カテゴリーが主題化されるにともない「カントの概念論」が「存在者の種類に関する教説」の影響を被ってプラトン化する、というように考えられていた。これに対してクリングスはカント哲学からの逸脱が生ずる場面を二つの媒介問題の間に、すなわち『ディマイオス』における「純粹形式と質料（Materie）」の媒介問題と『純粹理性批判』における「純粹悟性概念と純粹直観」の媒介問題の間に設定している。したがって「純粹悟性概念と純粹直観」の媒介問題が「純粹形式と質料（Materie）」のその影響を被ってプラトン化することが予想される。だがそうすると、ヘンリッヒの解釈における原カテゴリー

リーに相当する『純粹理性批判』にとつての未知なる主題とは何であろうか。言い換えると、いったいどこへ向けてカント哲学はプラトン哲学の方へとずらされていくのか。

『純粹理性批判』において認識の素材とされるのは直観の多様である。⁽ⁱⁱⁱ⁾それゆえ、『ディマイオス』におけるイデアを受け取る素材に対応するのは『純粹理性批判』における直観の多様であると考えられるかもしれない。ところが直観の多様が受け取られるのは直観の形式を介してであるとされる。つまりいかなる素材であれ、この形式を介することなしにはわれわれには与えられないと考えられている。これは、『純粹理性批判』において直観の多様が認識の素材とされるにしても、それが既に形式との関係のうちにあることを意味している。それゆえ、直観の多様から本来の素材にあたる部分を除去するならば、後に残るのは直観の形式であるということになる。この直観の形式が引用においては「純粹直観」と呼ばれている。それゆえ「純粹悟性概念と純粹直観」の媒介問題とは、異種的是であるけれども二つの形式、つまり感性和悟性の形式の間の媒介問題なのである。これに対して『ディマイオス』におけるイ

デアを受け取る素材はいかなる形式ももたないもの——つまりカント的に言えば、感性の形式も悟性の形式ももたないもの、要するに知覚も概念的認識もされないもの——と考えられている。この場合、素材とはイデアからたんに種的に区別されるもの、すなわちイデアとは異なる別種の形式ではなく、イデアに原理的に対立するものでなければならぬ。にもかかわらず、この素材による「純粹形式」の「受容」が生じなければ、世界の生起ということもありえないのである。

さて、このようにして二種類の媒介問題に焦点を合わせつつ『ディマイオス』の世界創造論を背景として『純粹理性批判』が眺められるならば、カント哲学の背後に、カント的に言えば感性の形式へと入りこむ以前の直観の多様を主題としうる次元が開かれることになる。ところが、これによって『純粹理性批判』は感性論のさらに手前へとずらされてプラトン化——いわば『ディマイオス』化——するであろう。しかしこのように『純粹理性批判』が『ディマイオス』的に改造されて成立する一種の超越論的哲学は、事物を感覚される手前で把握し、これが形式を受容して可

感的なものとなるプロセスを叙述しうるのでなければならぬ。というのも、「ヒュレー的世界がその形式の面から諸イデアの模像として理解されうるとき、この種の前生成的 (prägenetisch) プロセスがイデアと物質の媒介として前提されねばならない」⁽¹¹¹⁾からである。

ところが、これは(感性を含む広義の)理性の自己省察という『純粹理性批判』の立場そのものが『ディマイオス』へ向けて乗り越えられねばならない、ということでもある。というのも、問題は「いかにして純粹形式(イデア)に対立する原理であり、これにともなういかなる認識可能性からも逃れ去るように見える「受容者」(ヒュポドケー)はそもそも概念把握されるのか」ということ、要するにカント的に言えば、感性的にも悟性的にも認識不可能ものの認識に他ならないからである。

この超越論的哲学はいずれまもなくカントが不可能とみなした問いを自らの問いとして引き受け、『純粹理性批判』にとつては未知の領域に足を踏み入れるであろう。とはいえ——クリングスは主張するのだが——いかなる意味においても未知というわけではない。というのも彼によると、

問題の次元を世界生成以前の、自然に見定めてその中心に「物質の構成」を据えるとき、この超越論的哲学、すなわちシェリングの自然哲学はプラトンの『ティマイオス』に範を仰いでいるからである。

シェリングはプラトンによつて「世界の生成以前の」自然に関する問題設定へと導かれる。この問題設定は前生成的次元にまで達している。シェリングがここで問われているものために用いている「物質(Materie)」という概念は、それゆえ可視の世界のうちに現れる何かのための、例えば素材となる実体(ヒュレー)あるいは、それらによつて物体が構築される諸元素(ストイケイア)のための概念ではない。物質は諸元素の根底に存し、可視の世界の生成を可能にするもののため、そこにおいて可視の世界が原像の像として生起する「場」(コーラ)のための概念なのである。

「…」しかし、この形態を持たない不可視のピュシスとは何「である」のか。——この問題設定はもはや自然学に属するものではないし、もちろんイデア論(例

えば自然の「イデア」への問いとして)に属するものでもない。「…」これは原自然学(Proto-Physik)の問題設定と解されなければならない。というのも、それは可視的自然の根底に存する不可視の根源的自然に関するものであるからである。

原物質(Proto-Materie)への問いはシェリングのちの思弁的自然学の中心的問いになるであろう。彼の言葉で言えば問いは次のようになる。すなわち、それが——カントと共に——「空間を満たす限りにおいて、運動するもの」として自然諸科学の対象となる以前に、いかにして——超越論的生成的に(transzendental-gene-isch)——「物質」は概念把握されうるのか(すなわち構成されうるのか)。シェリングの「力動的原子論」の答えは、物質は諸力の関係として理解されなければならないと^(二四)なるであろう。

ところで、このようにクリングスによつて『註解』のうちに『純粹理性批判』の立場そのものの『ティマイオス』へ向けての超出が見て取られるわけであるが、これはつま

り、『純粹理性批判』が、広義の理性の自己省察として理性的なもの——理性的認識の網の目の中に入ってくるもの——の範囲を自己の活動領域としているのに対して、この意味における理性的認識の埒外に逃れ去るものまでも認識の対象としうるために、この超越論的哲学は理性的なものの痕跡が些かも認められない領域へ、理性の外部へ自らを乗り越えて出て行くことを余儀なくされている、という意味であつた。したがつてまた、『Genesis und Materie』の“Genesis”とは、クリングスが説明しているように、世界内の諸事物ではなく世界そのものの生起の謂であるのはよいとしても、同時にこれはたんなる思惟の内部ではなく、思惟の外部における現実世界の生起でもなければならず、しかもこの意味における“Genesis”が問われることと「世界のMaterie」が問われることは表裏一体をなしている、と主張されていた。しかしそうすると、このような解釈はそもそもどの程度の射程をもつものとして構想されているのであろうか。

このような問いを掲げてみると、ここでクリングスがヘンリッヒが最後に指摘していたのに匹敵する長期的かつ包

括的な視野のうちに『註解』を位置づけようとしていることが分かる。つまり、ヘンリッヒが『註解』のうちに「思弁的觀念論の道」の起点を見ようとしているのに対し、ここでクリングスは同じ『註解』のうちに「思弁的觀念論」を超えて行く思想的傾向を、言い換えると、主として後期シェリング哲学においてヘーゲル批判と連動して展開される「積極哲学」へと到るルートの起点を見出そうとしているのである。^(一五)

最後にクリングスの解釈の要点を、ヘンリッヒの解釈との対応関係が明らかになるように整理しておこう。第一に、『註解』の哲学的核心を『純粹理性批判』の『デイマイオス』的改造に、言い換えると没形式的素材による形式受容のプロセスの主題化に見ること、第二に、この没形式的素材の主題化にともなつて『純粹理性批判』の依つて立つ立場、理性的認識の立場そのものからの超出が指摘されること、第三に、『註解』の主題を一七九七年以後に現れる一連の自然哲学的著作と同一の問題圏に属するものと解すること、第四に、『註解』を「積極哲学」へと到る思惟の道

の起点と解することである。

三 「生成と物質」(二)

——二つのプラトン化の関係

さてこのようにしてヘンリッヒの『註解』解釈に対してクリングスは自らの『註解』解釈を対置させたわけであるが、これによって同じ一つの『註解』のうちに二つの異なるプラトン化(カント哲学のプラトンの改造)が指摘されたことになる。そうするとまず問題となるのは、これら二つのプラトン化が相互にどのような関係にあるのかということであろう。

『註解』のプラトン化についてクリングスは、ヘンリッヒの考えているよりも一層程度が激しいと主張していた。ところがこれら二つのプラトン化において、一方では原カテゴリーが、他方では没形式的物質による形式受容のプロセスが主題とされている。それゆえ一見すると、二つのプラトン化の相違はたんなる程度の差ではなく、質的な差で

あるように見える。しかしながら、想い起こしてほしいのは、原カテゴリー論といっても、その実質は二つの原カテゴリー間の「反立的関係」の媒介構造にある、ということである。言い換えると、二つのプラトン化は両者ともに反立的関係にある二項の媒介ということに本質を有している。しかも、ここにあるのは両者のたんなる形式的な類同性ではない。むしろ二つの反立的関係は実質的に同じものであり、この唯一の「反立的関係」が二つの異なったレベルにおいて見られているのである。

このような二重の観点が可能になっているのは『註解』の構造自体に理由がある。つまり『註解』においては『テイマイオス』と『純粹理性批判』の間に『ピレボス』の「存在者の種類に関する教説」が介在させられ、しかもこの介在は『テイマイオス』の世界創造論の諸原理に対して「存在者の種類」が対応させられるという仕方で行われている。この構造の故に、『テイマイオス』のカント的解釈に際して生ずるプラトンの変容は、カント哲学からの逸脱の度合いがどれほどであるかに応じて、より浅いレベル——「存在者の種類」——とより深いレベル——『テイマイオス』

の世界創造論の諸原理——という二段階のレベルで捉えられる。いずれのレベルで捉えられるかに応じて、「存在者の種類」としてのアペイロンとペラスの間の反立的関係があるいは世界創造論の原理としての没形式的物質（受容者）と形式（イデア）の間の反立的関係が主題と見なされるのである。

この二重構造の鍵を握っているのは「受容者」である。というのも、厳密に考えるならば、知覚も概念的把握もされないものという性格を保持しているのは「受容者」以外にはないからである。なるほど『註解』においてはアペイロンもまたそうした性格を持つと考えられるかもしれない。しかしそれは「受容者」との対応関係の故に「受容者」的性格を分有しているように見えるにすぎない。というのも、「存在者の種類」として、したがってカント的な意味におけるカテゴリーとして理解されている限り、アペイロンは実在性の形式ではあっても、やはりあくまでもその形式にとどまり、そのようなものとして概念的把握を許すものでなければならぬからである。

無論クリンクスにとっても、『註解』における『テイマ

イオス』解釈の基本方針はその世界創造論のカント的解釈にあるとされるのだから、「受容者」も——すなわち「イデア」は言うまでもなく「受容者」でさえも——文字通りカテゴリーとしてではないがやはりカテゴリー的に、言い換えると世界生成のための超越論的原理として理解されている。しかしたえそうであっても「受容者」は、「イデア」がそうであるのと同じの意味において超越論的原理であるのではない。というのも『テイマイオス』に即して理解する限り、「受容者」とはあくまでも形式一般の根源的原理である「イデア」に原理的に対立するもの、つまり質料一般の根源的原理でなければならないからである。要するに、この原理は『純粹理性批判』においては主題とされない超越論的原理なのである。

さてこのような『註解』の二重構造の故に、プラトン化のレベルが深まるにつれてアペイロンは「存在者の種類」であることを止めて、いかなる形式もたないものと化し、知覚や概念的認識の手の届かない場所へ逃れ去る。これにともなう反立的関係もたんなる概念相互の関係から、概念の内と外を跨いだ関係に変貌するということになる。要

するに、この場合には、或る意味で量的な差異が質的な差異を生むような構造が成立していると言えるのである。このように二つのプラトン化の関係を押さえてみると、ヘンリッヒの『註解』解釈に対してもう一つの解釈を対置させた際に、クリングスの狙いがどこにあったのかが判然としてくる。

そもそもクリングスはヘンリッヒと関心を共有していたと言える。つまり、彼らは二人とも、若きシェリングによってカントの『純粹理性批判』の改造が企てられた際に『註解』がどのような役割を果たしたか、という点に興味を抱いている。ただしその際にヘンリッヒはカテゴリー論に焦点を当てるという方策を採ったために、結果的にかなり特殊な見地に立つことになった。というのも、『註解』のなかでも本来の『テイマイオス』に関する部分を度外視して、もっぱら『ピレボス』に関する部分が果たした役割を強調するという結果になっていたからである。これに対して、クリングスは『純粹理性批判』の改造において『テイマイオス』そのものが果たした役割に着目するという方策を採用した。そして『テイマイオス』の「受容者」がシェリン

グの自然哲学において「物質」として主題化される、という見通しを示したのである。その限りにおいて、クリングスの解釈の骨子は、ヘンリッヒの解釈では見落とされているにもかかわらず、後のシェリングの思惟において——特に『純粹理性批判』の改造という企図において——積極的な役割を演じているような『註解』のなかの主題——要するに、それは『テイマイオス』の「受容者」という主題なのであるが——に光を当てることになった、と言えるであろう。

このようにヘンリッヒの解釈に対して自らの解釈を対置しようとするクリングスの意図は十分に納得しうるものであると言わなければならない。しかし実際にはクリングスの解釈は或る一つの事実を切っ掛けとして混乱し始めるのである。

四 「生成と物質」(三)

——クリングスの『註解』解釈における自己否定的契機

クリングスの解釈の要は、『註解』において主題とされている反立的関係がたんなる概念内のものではなく、概念の内と外を跨ぐものであるという点にある。ところが反立的関係が概念の外にまで及ぶとなると、それを捉えるために通常の理性的認識の場合とは別の——つまり知覚や概念的認識とは別の——認識手段が確保されなければならない。実際『ティマイオス』においては、そのような方法論的反省が行われ、対象の相違に基づく二つの考察の相違がこれ以上ないほど強調されている。^(二六)ところがシェリングはこの方法論的考察を無視している。

『註解』における方法論的考察の欠落はクリングスの解釈にとって非常に不利な材料となる。というのも、この欠落は事実上、方法論的一元論の採用であると解釈されかねないからである。しかしそれでは没形式的物質へと至ることはできない。すると結局、彼の云うプラトン化はヘンリッヒの云うプラトン化と同一の程度しか持っていない、言い換えると、反立的関係といっても概念の内のそれに過ぎないということになる。

こうした事態を前にしてクリングスは『ティマイオス』に従って、『註解』のうちに現実には存在しない方法論的考察を持ち込み、その欠落を補なおうとする。

形式への問いから形式を受容する自然への問いへのテーマの交代をきっかけに二度にわたってプラトンは探求が始めから開始されなければならない、この新しい始まりが新しい探求を、つまり形態を欠くけれどもあらゆる形式を受容する自然の探求を要求する、ということを強調している。このテーマは、真なる認識とは純粹形式の認識以外では有り得ないという真なる認識についてのプラトンによる理解の前では、奇異である。それゆえプラトンは方法についての反省を挿入する。たとえシェリングがプラトンの方法的熟考を黙殺しているとしても、それらはここでやはり素描されなければならない。

プラトンは次の問いによって不安を覚えている。つまり形式も示さず知覚もされえない或るもの、——客観的には存在しないが——にもかかわらず生成のため

の、すなわち可視的世界の生起のための共同原因として考えられなければならない或るものについて、いかなる仕方^(二七)で語られうるのか。

無論このような措置、つまり『ディマイオス』における方法論的考察のたんなる外挿は、『註解』における方法論的考察の欠落という事実を承認したくない、というクリングスの困惑を意味するものでしかない。したがって、いずれにしても彼は『ディマイオス』における世界創造論のカント的解釈という『註解』の基本戦略に立ち帰らざるをえない^(二八)。

シェリングはテーマと方法の異常さについてのプラトンの諸反省を取り上げない。[…]

方法的な諸問題に対してシェリングはたしかに無頓着であるが明らかに、それらが超越論的分析と可能性の必然的諸制約への遡源的推論というカントの方法によつて解決しうると信じているのである^(二九)。

しかし同じ可能性の制約への遡源であつても没形式的物質の場合には、それが「形式も示さず知覚もされえない」以上、形式である限りの可能性の制約の場合とは本質的に異なつた性格を持たざるをえない。それでは『註解』において「超越論的分析と可能性の必然的諸制約への遡源的推論というカントの方法」はいかなる拡張を被ることになるのか。クリングスはこの疑問に答えてはくれない。

結局クリングスは方法論的考察の欠落の事実を事実として、つまりシェリングの真意として認め、その理由を説明しようとする。

彼「『シェリング』は世界の生成における理性の関与が主題となるか、「物質」の関与が主題となるかに応じて、或る「新しい始まり」ないしは或る別の方法的状況について何も語らない。テュービンゲン人たちのヘン・カイ・パーンは一にして全なるものの分解を明らかに許さない。

しかしシェリングにおいてすでに一種の同一哲学の萌芽 (Ansatz) が前提される (unterstellen) としても、プラト

ンの『テイマイオス』の連関においては、この把握困難なゲノスへの問いは取り扱い注意 (prekär) であり続けているのである。^(三〇)

一転して、ここでは方法論的考察の欠落に「一種の同一哲学の萌芽」が見られている。しかしどうしてこれが方法論的考察の欠落を説明するのか。

クリングスによると、『テイマイオス』と一七九七年から一七九九年までのシェリングの自然哲学は、それらが共に「神的ヌースに質料を永遠の、不可視の、神的ならざるゲノスとして対置する教説」^(三一)である、という点において共通の立場に立っている。ところがこの立場は「シェリングが一八〇一年以来実現しようと努めている同一性の思惟と矛盾する」^(三二)。「というのも同一哲学はいかなる種類の二元論も拒絶しなければならないからである」^(三三)。これと同じことを質料概念という観点から言い換えると次のようになる。すなわち、自然哲学の質料概念は「超越論的哲学に対して自立的に自らを構成する思弁的自然学の根本概念」^(三四)としてなお『テイマイオス』によって規定されているのに対して

して、同一哲学の質料概念は「神的原理と自然的原理の統一」^(三五)に本質を有している。クリングスによると、このような立場の相違が原因となって、自然哲学における『テイマイオス』に対する肯定的評価が『ブルーノ』(二八〇二)や『哲学と宗教』(二八〇四)における否定的評価へと変わるのである。

プラトンの『テイマイオス』に対するシェリングの積極的な関連が決定的に、彼の「思弁的自然学」の自然哲学的構想に刻み込まれていた。この刻印は同一性の思惟が優勢となるにもなって終わる。絶対的統一の哲学なるものは実在性という、神的理性に対立させられている原理に関する教説に矛盾している。『ブルーノ』においてシェリングはこのプラトンに対して距離を置く。『哲学と宗教』においては『テイマイオス』の質料概念との決別が果たされる。^(三六)

したがって、形式的原理と質料的原理との相互対立という基本構想のうちに後の——両者の根底にそれらを統一す

るものが見出されることによってそれらが共にこのものの
顕現とされる——同一哲学的構想が混入することによって
方法論的考察が欠落した、というのがクリングスの言わ
んとするところである。

ところが一方で彼は、一八〇九年以後の著作（『自由論』
や『世界時代』）において再び——これらが「物質は絶対者
の内の一つの次元を表している」^{三七}という構想を同一哲学と
共有しているにもかかわらず——或る種の『テイマイオス』
的課題が再び追求されていると指摘する。

『テイマイオス』の精読はシェリングにとって、純粹
理性学においては解決不能な問題を取り上げる刺戟とな
ったように思われる。つまり、世界の実在——根拠として
考えられねばならない規定や形式を欠くものがいかにし
て思惟と哲学の対象となさるのか、概念から逃れ去
るものがいかにして概念とかかわるのか。「物質の構成」
という表題のもとでこの問いはシェリングの自然哲学を
貫いている。「根底」「我意」また「悪」という表題のも
とでそれは自由の哲学の中心に位置している。「過去」

という表題のもとで世界時代の哲学はそれとともに開始
される。後期哲学においては、シェリングの思惟をその
あらゆる局面において貫いているこの問いは、理性学と
しての概念の哲学（消極哲学）と積極哲学としての事
實的に生起する歴史の哲学との区別へと分節される。^{三八}

これにともなって『自由論』を始めとして一般にシェ
リングの後期思想においては『テイマイオス』に対する評
価が再び肯定的なものに変わる、と言われている。

しかしそういうことであるなら、同一哲学以降のシェ
リング哲学に見出される《世界の実在——根拠として考え
られねばならない規定や形式を欠くものを絶対者の内の一つの
次元と考える》という見地は《概念的把握も知覚もされな
いものの認識の主題化》を妨げない、ということになら
ないだろうか。したがって結局のところ、「同一哲学の萌芽」
が『註解』における方法論的考察の欠落を必ずしも伴い
はしない、とクリングス自身が認めていることにならない
だろうか。

私には、方法論的考察の欠落をきっかけとしてクリングスが二重三重の混乱に陥っているように思われてならない。そしてこのような混乱は、彼の解釈の基本方針が備えている形式的な明確さとは相反するような、シェリングの思想の実質に関する彼の見通しの不透明さに起因するのではないか、と想像する。つまり、彼の『註解』解釈はシェリングの思想展開に関する包括的・長期的な展望を示しつつも、それはむしろヘンリッヒの解釈との形式的な対応関係において暫定的に提示されたものにすぎず、実際のシェリングの思想の内実には照らして十分に吟味された上で提示されたものではないため、実際のシェリングの思想展開と接触せざるをえない局面にさしかかるとこのような軌みが生じてくるのではないか、と考えるのである。

もう少し具体的にこの点に関して詳述してみよう。

五 一七九七年からの回顧

——プラトン化とスピノザ化

クリングスはシェリングの自然哲学における質料概念が『デイマイオス』によって規定されていると主張している。しかしその際、彼は『デイマイオス』の質料的原理に見られる二つの契機——つまり、質料的原理が形式的原理に対して外的なものとして対峙しているという契機と質料的原理が知覚や概念による把握を拒むものであるという契機であるが——これらを判明に区別していない。シェリングの自然哲学における質料概念が『デイマイオス』によって規定されていると言うとき、彼はいずれの契機を念頭に置いているのであろうか。

このような曖昧さが生じている最も大きな要因の一つは、彼がシェリングの自然哲学、特にその「物質の構成」との主題的な連続性において『註解』を解釈しようとしながら、最初にその構想が語られる一七九七年の二つの著作『最近の哲学的文献に関する一般的概観』（一七九七～九八）（以下『概観』と略記）および『自然哲学考案』（一七九七）（以下『考案』と略記）に対し——何らかの理由から——十分に忠実でないという点にあるように思われる。

というのも、『考案』の緒論には既に次のような一節が

見出されるからである。

長い間すでに人間精神「…」は、世界の起源に関する様々な神話や詩に没頭していたし、全民族の宗教が精神と質料 (Materie) の抗争に基礎づけられていたが、その後になって一人の幸運な天才——最初の哲学者——が二つの概念を発見した。あらゆる後続の時代はこれらの概念においてわれわれの知の両端をつかんで、もはや放さなかった。古代の偉大な思想家たちは敢えてあの対立を乗り越えてゆくこととはしなかった。プラトンは未だに質料 (Materie) を自立した存在者として神に對置している。精神と質料を一なるもの、思想と延長を同一原理の樣態にすぎないものと見なした最初の人はスピノザであった。^(三九)

ここで「プラトンは未だに質料を自立した存在者として神に對置している」というのは否定的な意味で言われている。というのも精神と質料 (Materie) との對立に関して云えば、『テイマイオス』はスピノザ的にその同一性への認

識へと進まなければならないと主張されているからである。

『概観』での説明は一層詳細である。そこでは——注目すべきことに——「われわれの認識の形式はわれわれ自身に由来し、その質料は外部からわれわれに与えられる^(四〇)」という命題をカント哲学の主要命題と見なす「この上なく辻褄の合わない意見^(四一)」を論駁するにあたって、次のように述べられている。

あらゆる哲学体系が太古の時代から形式と質料をわれわれの知の両極と見なしてきた。

質料がわれわれによる全説明の最終的基体であることを人々はじきに見出した。それゆえ人々は質料そのものの起源を探索することを断念した。しかし人々はさらにこれ以外に諸事物に或るものを認めた。その或るものは人々がもはや質料そのものからは説明しえないが、にもかかわらずそれを説明するように強いられると感じたところのものである。「…」しかしこれらの規定は極めて密接に諸事物と連関しているので、人々はこれらの

規定なしに諸事物を考えることも、諸事物なしにこれらの規定を考えることもできなかった。したがって人々は前者を何らかの高次の存在者の（例えば、世界構築者の）悟性から初めて後者へと移行させようとしたが、それにもかかわらず、いかにして両者の間にこのような、つまりいかなる思弁的な技巧によっても解体できない不可分な結合が生じたのか理解したのではなかった。人々はそれゆえ、諸事物を同時にそれらの諸規定と一緒に或る神性の創造的能力から生じさせようとした。しかしながら、人々はいかにして創造的能力を持つ存在者が外的な諸事物を自分自身に対して呈示するかということはなるほど理解するが、それがこの同じものを他の諸存在者に対して呈示するかということは理解しない。換言すると、たとえわれわれがわれわれの外なる世界の起源を理解するとしても、われわれはやはりいかにしてこの世界の表象がわれわれの内へと到来したのかということは理解しないのである。^(四二)

ここでは世界創造論の歴史的展開が回顧され、そこに三

つの段階が区別されている。(一)『ティマイオス』、(二)『エチカ』、(三)『純粹理性批判』である。無論一七九七年の著作においても『ティマイオス』と『純粹理性批判』は無関係ではない。それどころか両者の関係は以前よりも密接であるとすら言える。というのも本来別の著作である『ティマイオス』の世界創造論が『純粹理性批判』との構造上の類似を根拠として一種の超越論的哲学として解釈されるのではなく、同じ一つの（唯一の）超越論的哲学（世界創造論としての）が『ティマイオス』から『エチカ』を経て『純粹理性批判』へと発展すると見なされているからである。^(四三)

このような超越論的哲学の歴史的展開という図式を背景として、まず最初に『ティマイオス』の難点が「質料」を「われわれによる全説明の最終的基体」と見なし「質料そのものの起源」の探求を断念したこと、および「形式」を世界構築者の悟性から「質料」へと譲渡されたとしたために両者の間の不可分な結合が理解できなかったことに見て取られている。そのために『エチカ』においてスピノザは「諸事物を同時にそれらの諸規定と一緒に或る神性の創造

的能力から生じさせようとした」のである。しかしこれによって「われわれの外なる世界の起源」は理解されても、「いかにしてこの世界の表象がわれわれの内へと到来したのか」は理解されないとされている。この課題の解決がカントの『純粹理性批判』で試みられる。つまり、シェリングはここで『純粹理性批判』を世界創造論の新しいヴァージョンと見なし、その新しい所以を「世界の表象」の「われわれの内へ」の「到来」の説明を試みようとしている点に見ているわけである。

ところが『純粹理性批判』の叙述そのものには未規定的な部分があり解釈の余地を残している。しかし『テイマイオス』から『エチカ』を介して『純粹理性批判』へという展開そのものが『純粹理性批判』の解釈、たとえばここでは物自体に関する解釈の方向性を規整するのである。つまり超越論的哲学の歴史的展開を踏まえる限り、テイマイオスの構図を前提とする物自体の解釈は「この上なく辻褄の合わない」ものとなる。というのも、超越論的哲学は『エチカ』的形態を経ている以上、物自体の解釈における真の争点は同一性において捉えられた二つの原理（形式と質料）

の由来でなければならないからである。

根源的には形式と質料は一つであり、両者が同一的で不可分の活動(Handlung)という同じ一つのものによって現存する後になって初めてわれわれが両者を区別しうる、ということを知っているわれわれは唯一の二者択一しか知らない。つまり、われわれに両者、質料と形式が外部から与えられるというのでなければならぬか、もしくは両者、質料と形式がわれわれから初めて生成し、発生するといふのでなければならぬかである。^(四四)

「物質の構成」が主題とされるのはこのような境位においてである。『純粹理性批判』のモデルに基づく『テイマイオス』解釈においてカント化とプラトン化の双方向的影響関係が生ずる、というのはヘンリッヒが提起した図式であるが、クリングスが彼の『注解』解釈を展開する場合にもこの図式が前提されていた。もちろん『註解』の内部にとどまる限り、この図式は有効である。しかしヘンリッヒにしてもクリングスにしても、彼らの『註解』解釈には別

の側面、つまりそうした影響関係によって生ずるカント哲学のプラトンの改造をシェリングののちの思想展開と結び付けて語る（『形式論』あるいは自然哲学的著作）という側面を有していた。問題はその際に『ティマイオス』的構図が維持されているのかということである。少なくとも「物質の構成」が主題とされる時点においては、神的ヌースに対して外的に与えられる質料という構図は採用されていない。

『純粹理性批判』がそのように解釈される余地を残しているとしても、超越論的哲学の歴史的展開を踏まえる限り、そうした構造を想定することはできない。『ティマイオス』が『エチカ』を介して『純粹理性批判』へと発展していく過程において否定されるべきものは否定され、保存されるべきものは保存される。クリングスが『ティマイオス』と自然哲学的著作との共通点と見なしていた「神的ヌースに質料を、永遠の、不可視の、神的ならざるゲノスとして対置する」という側面は否定されるべきものに属しているのである。

これによってクリングスの解釈が実際のシェリングの思

想において十分な検証を経ていないことが示されると共に、それが持っている曖昧さの一つが取り除かれる。つまり、シェリングは一八〇一年を待たずに、既に一七九七年の時点において『ティマイオス』的な世界創造論の構図を否定しているのである。しかも、この否認が『純粹理性批判』における物自体の解釈と連動していることを考え合わせるならば、前者の見解の成立時期を後者の見解の成立時期にまで遡らせることもできそうである。

さてそれでは、クリングスによってシェリングの自然哲学における質料概念を構成すると見なされていたもう一つの契機、つまり知覚も概念的把握もされないものの認識という契機についてはどのようなようになっていくだろうか。この点を確認するには一七九七年の著作における「物質の構成」の問題により立ち入った検討を加える必要がある。

註

- (一) Schelling, F. W. J.: „*Timaeus*“ (1794). Hrsg. v. H. Buchner. Mit einem Beitrag von H. Krings: Genesis und Materie-Zur Bedeutung der »*Timaeus*«-Handschrift für Schellings Naturphilosophie (Schellingiana Bd.4), Stuttgart-Bad Cannstatt 1994.
- (二) 管見の限りではあるが、なんらかの形でクリングスの所説を意識していると考えられる著作ないし論文のうち、代表的と思われるものの名を以下に列挙する。
- 【著作】 Bubner, Rüdiger: *Innovationen des Idealismus*. Göttingen 1995; Franz, Michael: *Schellings Tübinger Platon-Studien*. Göttingen 1996; Glova, Tanja: *Kosmos und System. Schellings Weg in die Philosophie* (Schellingiana Bd.15), Stuttgart-Bad Cannstatt 2002.
- 【論文】 Seubert, Harald: "Vernunft und Ananke. Zu Schellings „*Timaios*“-Kommentar und seiner Bedeutung für Schellings Denkweg" in: *Vorträge zur Philosophie Schellings. Berliner Schelling Studien, Heft 1*. Hrsg. v. Elke Hahn. Berlin 2000; Matsuyama, Juichi: "Die Vereinigung des Engengesetzten. Zur Bedeutung Platons für Schellings Naturphilosophie" in: *Das antike Denken in der Philosophie Schellings* (Schellingiana Bd.15). Hrsg. v. Rainer Adolphi u. Jörg Jantzen, Stuttgart-Bad Cannstatt 2004; Asmuth, Christoph: "Philosophie und Religion und der Platonismus" in: Schelling, F.W.J.: *Philosophie und Religion*. Hrsg. v. Alfred Denker u. Holger Zaborowski, Freiburg/München 2008.
- なお『註解』刊行以前であるため、クリングスの所説に関する言及はないが、『註解』を扱っている文献として、註三のヘンリッヒの論文以外に、Sandkaulen-Bock, Birgit: *Ausgang vom Unbedingten: über den Anfang in der Philosophie Schellings*. Göttingen, 1990; Iher, Christian

: *Das Andere der Vernunft als ihr Prinzip: Grundzüge der philosophischen Entwicklung Schellings mit einem Ausblick auf die nachidealistischen Philosophiekonzeptionen Heideggers und Adornos*. Berlin 1994 がある。ついでに著作における『註解』解釈は大枠におおむねヘンリッヒの解釈を踏襲しつつあると思われる。

(三) Henrich, Dieter: "Der Weg des spekulativen Idealismus. Ein résumé und eine Aufgabe" in: *Jakob Zwillings Nachlass. Eine Rekonstruktion*. Herausgegeben und erläutert von Dieter Henrich und Christoph Jamme. Bonn 1986.

(四) Der Weg des spekulativen Idealismus S.86-87.

(五) *Timaios-Kommentar* S.69.

(六) Genesis und Materie S.117.

(七) Vgl. Genesis und Materie S.125. „Mit Kants Ansatz war es möglich dem metaphysischen Realismus, der die Extenz einer »Ideenwelt« annahm, die Welt »in der Idee« (30) entgegenzusetzen. Sodann zeigt sich, daß der transzendentalphilosophische Ansatz es erlaubt, dem Begriff der Existenz eine logische Bedeutung beizumessen, die nicht formallogisch, sondern transzendentallogisch zu verstehen ist (Idee als Bedingung der Möglichkeit von Form).“

(八) Der Weg des spekulativen Idealismus S.87.

(九) 問題は(㉔)「カント自身の場合とは全く異なり、そしておそらくはラインホルトにインスピレーツ」(ganz anders als in Kant selbst und vielleicht von Reinhold inspiriert)と(㉕)「諸カテゴリーの關係は、それ自身が二つの根本カテゴリー相互の反立的关系として考えられうるような根本対立の媒介関係と解される」という二つの句の關係である。いまこゝであえて両者を切り離して相互に無關係なものと仮定すると、(a)は《カントからラインホルトを介してシェリングへというカテゴリー論の変貌の過程》について一般的に語った

ものとも解しうる。これに対して(b)は専ら《カテゴリーの三項構造》を話題としている。しかし両者が一つに結び合わされると、(a)の一般的な記述が(b)による限定を受け、(a)も《カテゴリーの三項構造》について語っていると読まざるをえない。無論それがごく普通の読み方なのであるが、今の場合は問題がある。というのも、《カテゴリーの三項構造》に関して“ganz anders”と言われると、カント自身のテキストに照らしても、それは言い過ぎの感を否めないからである(Vgl. Kant, Immanuel : *Kritik der reinen Vernunft*, B110, „2te Anmerk. Daß allwärts eine gleiche Zahl der Kategorien jeder Klasse, nämlich drei sind, welches eben sowohl zum Nachdenken auffodert, da sonst alle Eintheilung a priori durch Begriffe Dichotomie sein muß. Dazu kommt aber noch, daß die dritte Kategorie allenfalls aus der Verbindung der zweiten mit der ersten ihrer Klasse entspringt.“)。

実際、二〇〇四年の著作では、ヘンリッヒ自身が『純粹理性批判』のまさにこの箇所を引き合いに出してシェリングのカテゴリー論との構造上の類似性を指摘している。「シェリングにとつて原形式の三つ組みにおける第三項は第一項と第二項の結合として捉えられている。これはカントにおける模範に完全に則って行われている。しかもこの模範は、それにラインホルトも従っていたものであり、またそこにおいては、各組の第三カテゴリーが第一カテゴリーと第二カテゴリーの結合と解されうるものである」(Henrich, Dieter : *Grundlegung aus dem Ich. Untersuchungen zur Vorgeschichte des Idealismus. Tübingen-Jena (1790-1794)*, 2 Bände, Frankfurt am Main 2004, S.1676)。

こうした発言を考慮するなら、内容的に(a)を(b)と直結させて考えるのは困難となる。では、先の箇所はどのように解すべきなのか。《カテゴリーの三項構造》に関して“ganz anders”と言われているのではないなら、何についてそう言われているのであろうか。

引用箇所の直後にヘンリッヒは「同時に三つ組みはしかし、シェ

リングにとつては今や内的組織の展開にして絶対的原理の展開 (die Explikation der internen Organisation und Entfaltung des absoluten Prinzips) である」(ibid.)と述べ、さらに次のように続けている。「シェリングはどこでも自分では、彼をカント、ラインホルトおよびフイヒテから等しく分かつ、この差異を指摘しなかつた。この差異はしかし全く根本的な意義を持つている。カントとの合意を求めるシェリングの労苦のなかで、この差異が極めて早い時期に形成されたのは明らかである。『ディマイオス注解』においてはこの差異が既に、『ピレボス』の理念論 (Ideenlehre) を解説するためにシェリングが用いている。カントから採られたモデルに跡を残している。『註解』に従うと、被限定性と無限定性という根本理念は、悟性による被限定性がそこにおいて実現されるところの、直観の無限定な多様性に対する悟性の限定作用と同一視される」(ibid.)。したがって“ganz anders”とはカテゴリーの構造について言われているのではなく、むしろカテゴリーが根源化されること、あるいはヘンリッヒの言葉を借りるなら、「被限定性と無限定性という根本理念」が「悟性」と「直観」の媒介関係として捉えられることによつて、「三つ組み」が「内的組織の展開にして絶対的原理の展開」となる、という点に関して言われていることになる。そういうことであるなら、(a)は《カテゴリーから原カテゴリーへという根源化の過程》について述べられた文章と解しうるだろう。

ただし、たとえ以上のような考察を間に挟んだとしても、一九八六年の記述を全体として、この二〇〇四年の見解のいささか舌足らずな表現と見なしうるか否かは判断の難しいところである。

(一〇) Der Weg des spekulativen Idealismus S.87.

(一一) 本論第二章を参照。

(一二) Der Weg des spekulativen Idealismus S.87.

(一三) 『註解』には日付は記されていない。しかし『註解』編者に

よると (Timaios-Kommentar S.13-14)」、この草稿の成立時期は同一ト内における直前の草稿との関係から一七九四年一月以後と考えられる。また『形式論』(同年九月九日脱稿)には『知識学の概念』の影響が顕著であるのに『註解』にはその痕跡が一切見られないことから、『註解』が『形式論』執筆中あるいは執筆後に成立した可能性は低い。ところで『知識学の概念』は五月一日頃の刊行とされ、それをシェリングが落手したのは早くとも五月中旬から下旬であると推定されている。以上の考察をふまえてブフナーは『註解』の成立時期を、一七九四年一月ないし二月から五月ないし六月の間と結論している。Vgl. Schelling, F. W. J.: *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling. Historisch-kritische Ausgabe. Reihe I, Werke I. Hsg. von Wilhelm G. Jacobs, Jörg Janzen u. Walter Schiele*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1976, S.250.

なおフランツもこの件に限って言えばブフナーとほぼ同じ結論に達している。Vgl. Schellings *Tübinger Platon-Studien*, S.319-320.

またグローニヤの著作には、テュービンゲン時代のシェリングのテキストを成立順に整理した「一覧表が収録されている。Vgl. *Kosmos und System*, S.275-278.

(一四) この点を初めて明確に指摘したのはザントカウレンである。彼女によると『形式論』は「このようにたしかに直接的にはフィヒテによって促され、フィヒテの恩恵も被っているが、しかしそれはやはり別様に組織されている。これは問題の叙述のみならず根本諸命題の演繹に関するとも言える」(*Ausgang vom Unbedingten* S.22)。とりわけ後者においては「シェリングのフィヒテ読解を導いていた『レボス』解釈における先行理解が顕在化する。フィヒテによる根本諸命題の演繹はかろうじて表面的に受け入れられているだけで、シェリングの本来の意図はそれらのうちに対立の媒介を再認することにある。[...]シェリングはこの思考の歩みを次のように締め括る。

『これらの根本命題はあらゆる学問の原形式、無制約性の形式、被制約性の形式、そして無制約性によって限定された被制約性の形式を含む』(1.101)。これらの定式化はフィヒテから見ると馴染みのないものだけに、なおのことそれらは構造の上から見て、シェリングが解釈していたプラトンの諸概念、ペラス、アペイロンおよびコイノンを想起させる」(S.26)。というのもフィヒテは次のように述べているからである。「それゆえ、また三つ以上の根本命題はありえないことにもなる。すなわち、絶対的にして端的に自分自身によって、形式および内容の両方に関して、限定されたもの、形式に関して自分自身によって限定されたもの、そして内容に関して自分自身によって限定されたもの」(Fichte, J. G.: *J. G. Fichte - Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Hsg. v. R. Lauth und H. Jacob, Bd. I, 2. Stuttgart-Bad Cannstatt 1965, *Begriff der Wissenschaftslehre* S.122)。つまり、フィヒテにおいて第三根本命題は第一根本命題と第二根本命題の総合ではなく、第一根本命題の下位に第二・第三根本命題が同等の資格で従属している。Vgl. Schellings *Tübinger Platon-Studien*, S.277.

なおのちにヘンリッヒ自身も『概念』と『形式論』の比較検討を試みている。Vgl. Henrich: *Grundlegung aus dem Ich*, S.1649-1657. XVI. Schellings erste Fundamentalphilosophie, 7. Schellings Anschluss an Fichte.

(一五) Der Weg des spekulativen Idealismus S.87.

(一六) Ibid.

(一七) *Ausgang vom Unbedingten* S.21. なおこの箇所にはザントカウレンは次のような註をつけている。「或る意味においてこのようにしてまさに、神話の形式において理性に適合しないものを叙述する、というプラトンの意図は裏をかかれ無効にされる。彼の啓蒙主義的な振る舞いのおかげで、シェリングは神話を(二)では、彼の聖書解釈

の場合と同様に理性の感性的形式と解している。この形式はそれゆえその理性的な核心部において説明可能なのである。しかし『註解』（あるいはテュービンゲン時代のシェリングのプラトン研究）が「神話の形式において理性に適合しないものを叙述する、というプラトンの意図」を無効にしているかどうかは問題である。次章で見るようにクリングスの『註解』解釈（かかろ「プラトンの意図」が「物質の構成」に継承されていると主張する）はその種の反論の一つである。またクリングスの『註解』解釈には必ずしも賛同しないフラントも、シェリングの神話解釈が完全に「啓蒙主義的」であるという主張に関しては同意しないだろう。というのもフラントによれば、テュービンゲン時代のシェリングの神話解釈には神話を或る種の現象の説明に用いる一面があるからである。「もちろん当該の諸現象に関するこうした『神話的』解釈はもはや必ずしも筋金入りの合理主義とは相容れない。その限りに対して「[:]」まさに既に早くからシェリングにおいては厳格な合理主義の偏狭さから逃れようとする様々な努力も存在していた」(Schellings *Tübinger Platon-Studien*, S.205)のである。

(一八) ここでヘンリッヒはドイツ観念論の展開に関してヘーゲルやさらには彼の図式を踏襲するR・クローナーに代表される古典的見解(カントからヘーゲルへ至る歩みを論理的必然性に基づく単線的発展と見なす)を墨守しているのではない。ヘンリッヒはこうした「古い」理解に対して「カントと、彼を引き合いに出す運動との間の不連続性を承認し、それにもかかわらずカントとこの運動との内的連関を哲学的に重要な解明へともたらす」「新しい」理解を対置している。そしてあくまでそうした不連続性を踏まえた上で別の図式を提起している。その図式によると「ドイツ古典哲学の展開」は大きく二つの経路をもっている。カントからフィヒテへと至る第一の経路、シェリングからヘーゲルへ至る第二の経路である。ヘンリッ

ッヒの言う「思弁的観念論の道」とは「本来的な意味で思弁的な観念論へ至る第二の発展の局面」を意味している。

こうした図式に従うと——カントとフィヒテの間、あるいはシェリングとヘーゲルの間に比して——フィヒテとシェリングとの間には一層大きな不連続性が見出される。第二の経路は「カントおよびフィヒテの超越論的哲学から出発して、より狭い意味において『思弁的』と呼ばれうる観念論の構築へと至った歩み」(S.78)であり、ここでは超越論的哲学の理論形式が形而上学的不いしは存在論的理論形式と結合され、前者から後者への移行が果たされる。ところが「ヘーゲルの叙述においてはフィヒテからシェリングへの移行はほとんど直接的に、そして純粹に、フィヒテの思惟そのものにおいて既に解き放たれていた論理学の首尾一貫性に基づいてのみ生じている」(S.82)。これに対して「新しい叙述は、シェリングとヘーゲルが一八〇一年以後差し当たって共通に支持していた立場の内に一連の発端、つまり、フィヒテから遠ざからせ超越論的反省に対立するモチーフを自立的な展開へともたらした一連の発端の後の帰結を見る」(ibid.)のである。初期シェリングのプラトン研究が注目されるのも、こうした発端の一つとして他ならない。

さてなるほどヘンリッヒの新しい図式においては「思弁的観念論の道」がその「発端」に向けて問い直されている。しかし終点に目を向けるなら、この道は思弁的観念論「へ至る」道であってそれ以上ではない。その意味ではヘンリッヒの図式もヘーゲルやクローナーのそれと大差はない。その限りに対して——「思弁的観念論の道」という視圏にとどまる限りに対して——ヘンリッヒの『註解』解釈はクリングスの『註解』解釈とは大きく異なると言わざるを得ない。

(一九) *Genesis und Materie* S.122-123.

(二〇) *Genesis und Materie* S.123.

(二一) *Genesis und Materie* S.123-124.

(一二) Vgl. *Kritik der reinen Vernunft*. A19, B33-A22, B36.

(一三) *Genesis und Materie* S.142.

(一四) *Genesis und Materie* S.135-136.

(一五) クリングスの『註解』解釈がヘンリッヒのそれと大きく異なるのは、シェリングの後期哲学をも視野に収めつつ『註解』の意義を考察している点である。もちろんその意味で言えば、ザントカウレン『無制約者からの出発 (*Ausgang vom Unbedingten*)』やイーバー『その原理としての理性の他者 (*Das Andere der Vernunft als ihr Prinzip*)』もシェリングの後期哲学に至る視圈の内に『註解』を位置づけようとしている。しかし当の位置づけそのものはヘンリッヒの場合と大きく相違しているわけではない。というのも、『註解』は直接的には『形式論』における『概念』からの逸脱を説明するもの、すなわち註一八の意味における「思弁的觀念論の道」の発端の一つとして位置づけられるからである。言い換えると、『註解』は「思弁的觀念論の道」の発端に位置する限りにおいて、間接的にシェリングの後期哲学の発端でもあるというにすぎない。クリングスの場合は事情はちょうど逆になっている。すなわち『註解』は後期哲学の発端である。そしてそうである限りにおいて同時に「思弁的觀念論の道」の発端でもあるというにすぎない。「思弁的觀念論の道」を貫いて次第に開花していくのは『註解』における後期哲学の萌芽なのである。

(一六) Vgl. *Platon: Timaios* 47e-52d. 言いでは「生成するもの」、「生成するものが、それの中で生成するところの、当のもの」、「生成するものが、それに似せられて生じる、そのもの、もの」(モデル) (50d) という三者が区別され、前二者が「ありそう、な言論」(48d)の対象とされる。しかしこれら二者の内、さらに前者は「感覚の助けを借りて捉えられるもの」(52a)とされるのに対し、後者(「受容者」(場))は「一種の擬^{まが}いの推理とでもいうようなものによって、感覚には頼

らずに捉えられるもの」(52b)とされている。種山燕子『「ディマイオス」解説』『プラトン全集』第12巻、岩波書店、一九七五年参照(特に二七七-二七九頁、二八八頁)。なお本文および註におけるプラトンの引用は岩波版『プラトン全集』に基づいている。Vgl. auch *Genesis und Materie* S.131-133.

(一七) *Genesis und Materie* S.131.

(一八) 引用の際に省略した箇所は、実際には『註解』における方法論的考察の黙殺^②という問題と密接に関連づけられている。

省略箇所を補うと、引用の全体は次のようになる。「シェリングはテーマと方法の異常さについてのプラトンの諸反省(『ディマイオス』48c-d)を取り上げない。明らかにその理由の一つは、彼がプラトンの方法に関する慎重さ(Platons methodische Vorsicht)を既に予め(二五頁以下、註C参照)完全に誤解していたからである、つまり、国家ないし教会による検閲に対する神学政治的な自己防衛と解していたからである」。したがって、(a)註Cによると、シェリングは「プラトンの方法に関する慎重さ」を「神学政治的な自己防衛」と誤解している。(b)シェリングは「テーマと方法の異常さについてのプラトンの諸反省を取り上げない」。(c)(a)は(b)の理由の一つである。

にもかかわらず、敢えてこの箇所を省略したのは、(a)の主張に関して、ゆえにまた(c)の結論に関しても疑念が残るからである。(a)は註Cに依拠している。したがって問題は、註Cから(a)が導出されるか否かである。

註C自体は『ディマイオス』28d4-29a7に関するもので、『ディマイオス』においては至る所で唯一の「世界創造者」という理念に対する示唆が十分に発見されるであろう。この箇所もそれを示唆している」という言葉で始まる。それゆえ、(i)註Cの主題は『ディマイオス』における「唯一の世界創造者」という理念に対する示唆^③である。さて、(ii)「偏見のない歴史研究者」なら、「古代の哲学者は唯一神とい

う理念を知らない」という意見も、《さもなければ古代の哲学者は唯一神という理念を啓示によって獲得した》という意見も『ティマイオス』によつては確証されないことを認めるだろうが、「この上なく誠実な確信に従えば偽である」命題に対する「反対の声」も、特定の意見を優遇する政治的優勢によつて「沈黙を、あるいは、ほとんど聴き取ることのできないひそひそ話」を強いられる。ところが、iii) こうした状況はシェリングの時代のみならずプラトンの時代にも見出される。それゆえ「彼はちやうど、現在もお真理の抑圧された友人がとらざるをえない口調で語る」。すなわち、「そのように注意深く (behiutsam)、そのように不明瞭で曖昧に (dunkel u. zweideutig) それ『デミウルゴス』について述べる」のである。(iv) 『ティマイオス』の次の二つの箇所はその口調の例証である。

【引用①】「神々について『…』どこから見ても完全に整合的な、高度に厳密に仕上げられた言論を与えることができない『…』話し手の私も、審査員のあなた方も、所詮は人間の性を持つものではない『…』」従つて、こうした問題については、ただあり、そんな物語を受け入れるにとどめ、それ以上は何も求めないのがふさわしい『…』。【引用②】「その他の神霊のことですが、その生まれを語ったり識ったりすることは、われわれの分際では及びもつかないことですから、以前にこのことを語った人々を信用しなければなりません。『…』これらの話に、何かそれらしい証明や、必然的な証明がなくても『…』慣例に従つて、その言うところを信用しなければならぬ」。

さてここでクリングスの主張に戻ると、(a)が成立するためには、註Cは《有》と「生成」という対象の相違に即して言論を「真実の言論」と「ありそうな言論」に区分する『プラトンの方法に関する慎重さ』を主題とし、二つの引用もその例証でなければならぬ。しかし実際には註Cは、神、神々、神霊に関する「現在もお真理の抑圧された友人がとらざるをえない口調」を主題とし、二つの引

用もその例証として提示されている。なるほど引用①は元の文脈においては「プラトンの方法に関する慎重さ」を扱っている箇所であったかもしれない。しかし引用①は「プラトンの方法に関する慎重さ」を扱っている最も典型的な箇所の一つ（例えば『ティマイオス』47c5dのような）というわけではない。さらに引用①には引用②が並置され、それによつて引用①の読み方が引用②に規整されるように仕組まれている。つまり、「神々について『…』あり、そんな物語を受け入れるにとどめ、それ以上は何も求めない」というのは、この註Cにおいては「何かそれらしい証明や、必然的な証明がなくても以前にこのことを語った人々を信用」すると同義に読まれるべきことが暗示されているのである。この点を踏まえながら引用①に戻ると、これも「プラトンの方法に関する慎重さ」を扱っている箇所としてではなく、シュテイフトに於いて「現在もお真理の抑圧された友人がとらざるをえない口調」に瓜二つと感じられるものとして殊更に選出されているように思われる。これに対して「プラトンの方法に関する慎重さ」を扱っている典型的な箇所は、必ずしも同時に「現在もお真理の抑圧された友人がとらざるをえない口調」でもあるわけではない。言い換えると、それが《神学的主題をめぐつて、理性によつて見出された真理を韜晦するために、權威に譲歩するかのように述べる表現法》でもあるわけではないのである。

したがって結論を言えば、註Cが「プラトンの方法に関する慎重さ」についてのシェリングの態度に関して何事かを教えてくれる、というクリングスの前提は間違っているように思われる。註Cはあくまでもプラトンの極めて特殊な表現に対するシェリングの過敏な反応を記録したものにすぎないのではないだろうか。だとすれば、註Cから(a)は導出されない。そうである以上(c)も成立しない。引用を一部省略したのは、このような理由によつてであった。

(一九) Genesis und Materie S.133.

- (二〇) Genesis und Materie S.139.
- (二一) Genesis und Materie S.148.
- (二二) Ibid.
- (二三) Genesis und Materie S.149.
- (二四) Genesis und Materie S.148.
- (二五) Genesis und Materie S.147. Vgl. Schelling, F. W. J. : F. W. J. von Schellings sämtliche Werke. Hrsg v. K. F. A. Schelling. Abt. 1. Bd. 4. Stuttgart-Augsburg 1859. S.310.
- (二六) Genesis und Materie S.150.
- (二七) Genesis und Materie S.148.
- (二八) Genesis und Materie S.127.
- (二九) Schelling, F. W. J. : *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling. Historisch-kritische Ausgabe*. Reihe 1, Werke 5. Hrsg von Manfred Durner, Stuttgart-Bad Cannstatt 1994. S.76.
- (三〇) Schelling, F. W. J. : *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling. Historisch-kritische Ausgabe*. Reihe 1, Werke 4(= AA I, 4). Hrsg von Wilhelm G. Jacobs u. Walter Schiele, Stuttgart-Bad Cannstatt 1988. S.82.
- (三一) Ibid.
- (三二) Allgemeine Übersicht AA I, 4. S.83.
- (三三) 『悪の起源』(一七九二年)が一種の歴史哲学的構想を含むと云う指摘は以前からなされていた(Vgl. Jacobs, Wilhelm G. : *Gottesbegriff und Geschichtsphilosophie in der Sicht Schellings*. Stuttgart-Bad Cannstatt 1993. 9. Schellings erste Geschichtsphilosophie. S.187-210 ; vgl. auch denselbe : *Geschichte als Prozeß der Vernunft in : Schelling. Einführung in seine Philosophie*. Hrsg. v. H. M. Baumgartner. Freiburg/München 1975.)。またこの同じ構想が、私見によれば、『形式論』の背景の一つをなしている(拙論「シェリング哲学の出発点——人間の理性の起源と歴史の構成」『近世哲学研究』第六号、京大・西洋近

世哲学史懇話会、一九九九年、参照)。だとすると、『形式論』と執筆時期を接する『註解』に関して事情が同じであったとしても不思議でない。しかしこの点を初めて明確に指摘したのはグローニヤである。グローニヤは『註解』(S.31)における「プラトン哲学全体を説明するための鍵は、彼が至るところで主観的なものを客観的なものと転移している(er überall das subjektive aufs objektive überträgt)」ことへの注意である」という命題を彼女の解釈の中心に据えた。この命題はシェリングによる『ディマイオス』解釈の方法論と考えられ、その重要性はヘンリッヒ、ザントカウレン、フランツらによって夙に指摘されていた。しかしグローニヤによれば、この命題そのものが「そこから独断論哲学と批判哲学の内容的一致が導出されるような、その完全な展開にまで至る唯一の真理の連続性と伝統」(Kosmos und System S.5)と云う哲学史構想を前提としている。そしてこの前提の故に『註解』におけるプラトンとカントの思想的対話が可能となっているのである。「この『転移の命題』が同時に綱領的でかつ極めて豊穡な自己解釈として読まれうるということが示されるなら、この『鍵』は『第一哲学』に関して次のことを理解させてくれる。つまり、シェリングが、超越論的哲学的な端緒を伝統的手段を用いて完成させるという意図のもとで、哲学史においては神にとっておかれていた範型や述語を超越論的哲学の枠内で「絶対的自我」に帰属させるのは何故か、と云うことを」(ibid.)。

このようなアプローチに基づくグローニヤの『註解』解釈の全体を検討する余裕は今はない。しかし彼女の基本主張を最も広い意味にとって、それを《「理性の歴史」という一種の哲学史的構想が『註解』の前提の一つをなしている》と解しうるならば、私としてはそれに異を唱える理由はない。その場合、一七九七年の構想はこの初期構想の具体化ないしは発展形態と見なしうるであろう。

(四四) Allgemeine Übersicht AA I, 4. S.91.

Das Unbedingte und die intellektuelle Anschauung

— Vom *Timaios-Kommentar* zur *Ichschrift* —

Erster Teil

Kouki ASANUMA

In seinem Aufsatz »Der Weg des spekulativen Idealismus« (1986) hat Dieter Henrich eine in der Forschungsgeschichte zum ersten Mal erscheinende Interpretation von dem Schellingschen *Timaios-Kommentar* vorgelegt. Seine These ist folgende: Schellings Absicht in diesem Kommentar ist zu zeigen, dass Platons Rede von der Welterschöpfung in Wahrheit nichts anderes als die Kantische Konzeption der Erkenntnis intendiert. Diese Identifizierung bringt aber in die Organisation von Kants Kategorienlehre zugleich auch eine neue platonische Struktur. Diese nicht explizierte Verschiebung der Kategorieninterpretation erhebt sich zum ausdrücklichen Prinzip in der *Formschrift*. Der *Timaios-Kommentar* ist also inhaltlich mit der *Formschrift* verbunden und erklärt, warum die Kategorienlehre in dieser anders als in der Fichteschen *Begriffsschrift* organisiert ist, obwohl die *Formschrift* das Anliegen Fichtes teilt.

Im Jahre 1994 wurde die Erstedition des *Timaios-Kommentars* publiziert. Diese enthält auch eine interpretierende Studie von Hermann Krings mit dem Titel »Genesis und Materie - Zur Bedeutung der »Timaeus«-Handschrift für Schellings Naturphilosophie«. Wie schon dieser Titel suggeriert, ist die grundlegende Hypothese der Kringssschen Interpretation folgende: Der *Timaios-Kommentar* ist eine Art Vorläufer der späteren Naturphilosophie Schellings, insbesondere ihres Materiebegriffs. Diese Hypothese ist, obwohl Krings dies nicht so explizit sagt, zweifellos eine Antithese gegen die Interpretation Henrichs.

Michael Franz kritisiert aber in seinen *Schellings Tübinger Platon-Studien* (1996) diese Hypothese von Krings. Er behauptet, dass die naturphilosophische Auffassung des Textes im Ganzen, wie sie Krings einleite, deswegen zu einer einseitigen, und darum letztlich inadäquaten Interpretation führe, weil sie an einem anderen Hauptanliegen des Textes vorbeigehe und den Kontext auf die Naturphilosophie einenge. Obgleich ein doppeltes Interesse Schellings Denken in diesem Kommentar leite, so führt Franz weiter, sei das Thema, dem Schellings vorrangige Bemühung gilt, doch nicht das naturphilosophische, sondern das transzendentalphilosophische, also dasselbe wie in der *Formschrift*.

Aber Franz erklärt nicht, wie beide Themen in *Timaios-Kommentar* zusammenhängen. Diesen Zusammenhang aufzuklären ist die Aufgabe der vorliegenden Abhandlung. Diese hat zwei Teile. Im ersten Teil zeige ich, dass zwar für beide Interpretationen gleichermaßen gute Argumente im Text gefunden werden können, aber die Kringsssche Interpretation, zumindest in ihrer originalen Form, einige entscheidende Schwächen hat, also nicht überzeugend ist. Dann versuche ich im zweiten Teil, die Kringsssche Interpretation umzubilden, indem ich sie von der

unmittelbaren Beziehung mit der Naturphilosophie freimache und neuerlich auf die *Ichschrift*, insbesondere auf ihre Kerngedanken des Unbedingten sowie der intellektuellen Anschauung beziehe. Die vorliegende Abhandlung zielt nämlich darauf ab, den scheinbaren Gegensatz beider Interpretationen des *Timaios-Kommentars* aufzuheben und dadurch eine neue Perspektive auf Schellings frühere Philosophie zu eröffnen, indem sie den thematischen Zusammenhang des *Timaios-Kommentars* mit der *Ichschrift* klarmacht.